

# J-CEF NEWS

no. 2

2014 WINTER

## リレーエッセイ

○ 点を打つこと、繋ぐこと

／黒崎洋介（神奈川県立湘南台高等学校教諭）

## 実践事例紹介

○ 「まちつくクラブ in 湘南」の取り組み

／名城可奈子（湘南まちいくプロジェクト）

## 書評

○ 「シティズンシップの教育思想」小玉重夫著

「シチズン・リテラシー ～社会をよりよくするために私たちにできること～」鈴木崇弘ほか編著

／長沼豊（学習院大学文学部教育学科教授）

## 特集

○ 「シティズンシップ教育を進める上で何を大切にすべきか？」

／伊藤章（NPO 法人国際ボランティア学生協会理事）

／中村陽一（立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科教授）



## 点を打つこと、繋ぐこと

神奈川県立湘南台高等学校  
教諭 黒崎 洋介

「選ぶ道がなければ、迷うこともない。私は嫌になるほど自由だった。」

阿部公房さんの小説『鞆』における締め言葉です。『鞆』は、高校の国語の教科書にも取り上げられる作品です。まるで意思を持っているかのような鞆によって導かれ、何も考えることなく、ただ鞆に身を任せて歩く男の物語です。この作品を題材とした授業では、「鞆は何を表しているか」という問いがたてられます。「選ぶことのできる道がおのずから制約されてしまうわけです。鞆の重さが行き先を決めてしまうのです。」という言葉や、冒頭の言葉から、鞆が人間から主体性を奪うものの象徴として描かれていることが分かるのです。

この『鞆』という作品は、教育が抱える課題を私たちに教えてくれます。これまでの教育は、子どもに鞆を持たせることに躍起になってきました。そして、鞆の中に「良い大学 - 良い会社 - 良い人生」という一元的な価値観を善意で詰め込んできました。確かに、現在私たちが享受している豊かさは、こうした教育の成果と各人の努力の賜物です。しかし、多くの課題が山積する 21 世紀の日本社会では、社会の変化に伴い、鞆は古くなり色あせて

しまいました。それにも拘わらず、私たちはあえて気づかないふりをしながら、執拗に子どもに鞆を持たせてはいないでしょうか。そこでは、教育の目的は「会社人」の育成とされ、偏差値が幅を利かせ、受験に必要な知識だけが効率よく詰め込まれていきます。子どもが主体的に考え判断することはなく、まるで無色な人間ができあがります。ある子どもは古ぼけた鞆に必死にしがみつきの、別の子どもは鞆に身を任せ、また別の子どもは鞆から振り落とされています。これが、私たちが向き合うべき教育の課題です。

一方で、『鞆』は、教育が秘めている可能性も私たちに感じさせてくれます。作品中では鞆に導かれる男のその後の動向は記されていないため、「このあと男はどうなるか」という可能性ある問いをたてることもできるので。昨今の学校内外における多くの事例が物語るように、鞆に頼らなくても、自分たちで道を選び、自分たちの足で歩いていくことを目指した教育が増えています。例えば、新学習指導要領で重視される「習得・活用・探究」という学習方式は、社会の諸課題を知り、解決策を考え判断し、解決に向け行動する姿につながります。また、協同的

な学び合いや言語活動の充実、課題の解決に向け多様な他者と協同する姿につながります。こうした教育の目的は「社会人」の育成とされ、確かな知識に基づいた価値判断や意思決定を通じて、実社会や実生活に生きる力が備わっていきます。暉峻淑子さんが著書『社会人の生き方』の中で指摘するように、「会社人」と「社会人」という一文字入れ替わっただけの言葉が持つ意味合いは大きく異なります。これがシティズンシップ教育の可能性であり、次代の教育の理念でもあるのです。

私は、教育を「点を打つこと、繋ぐこと」だと考えています。点と点を繋ぎ、多様な線を描くには、より多くの点を打ったほうがよいでしょう。また、点を繋いで線を描かなければ、ものさしで長さを図ることはできません。教育を巡ってはどちらか一方が語られることが多いですが、私は、点を打つことと繋ぐことの両方が大切だと思うのです。シティズンシップ教育の積み重ねが、多くの点を打ち、線で繋ぐことにより、豊かで温かな「場」を創れるようにしたいものです。

黒崎 洋介(y-kurosaki@pen-kanagawa.ed.jp)